フイリピン滞在記 ②---バギオの日系人社会を訪ねて（続）

為我井輝忠

前回、バギオを訪ねて、日系人の方々にお会いしたことを報告したが、日系人と言ってもバギオとその周辺に具体的にどのくらいの人が住んでいるのか分からなかった。そこでアボン（日比親善友好会館）の職員の方にお聞きすると、次のような数字を教えてくれた。

1世（日本国籍を持つ者）	10人
2世	602人
3世	2,003人
4世	3,414人
5世	1,419人
6世	47人
合計	7,495人

この数字によると、1番多いのは4世で、この世代だけで45%を越えている。これに5世と6世とを合わせると優に65%以上が昭和後半から平成以降の新しい世代と言える。

今回、アボンで東地初子（ ジュリエッタ・ロカノ）さんにお会いすることが出来た（前回簡単に紹介したが）。彼女は1941年4月生まれで、現在73歳であるが、父は和歌山県出身の日本人で、母親はフイリピン人、そして彼女は2世になる。兄2人と妹が1人いた。戦争中、彼女は父親と母親、妹の4人で山中を逃げ回り、終戦と共に故郷に戻って来たが、父親は日本に強制送還され、残された家族はハポン（日本人）と蔑まれた。苦汁に満ちた長い生活が続いた。

次男は日本軍の軍属として徴用され、終戦時に民間人への暴行、虐待、殺害を理由に山下泰文将軍と大田清一大佐（マニラ憲兵隊長）と共に処刑された。

長男は進学のために和歌山の実家に戻っていて、終戦時には日本にいたため長いことフイリピンに残

今回多くのことを教えられた『バギオの虹』（鴨野守著、2003年2月20日発行）

日系人の5世・6世の方々

アボン内にある、シスター・テレジア・海野記念ホール

フイリピンの民族舞踊を踊る日系人の子弟たち

された家族と会うことが出来なかった。彼は家族はもう死んだものと思いこんでいたが、シスター海野から生きていると知らされ、フイリピンを訪れ再会を果たした。

彼女から聞いた話は以上のようなことであったが、長い間日系人であるが故に苦労されたことは、多くのこの地に住む他の日系人と全く同じで、長い間の苦労を思うと言葉に詰まってしまった。

前回シスター海野のことは詳しく述べたが、彼女がバギオの日系人について初めて知ったのは、たまたま健康上の理由でバギオにやって来た時のバスの中で、「あなたは日本の方ですか。このベンゲット道路は、かつて日本労働者が出稼ぎに来て、尊い犠牲を払いながら完成させたものです」と話しかけられた時だった。この話を聞いてシスター海野は、バギオに留まり、日系人の子孫を探そう、という強い思いを突きつけられ、ようやく最初の日系人に出会うまで３カ月もかかった。

しかし、彼女のこうした行為は単に日系人を探しだそうとした衝動的な考えによるものではなく、戦争時に日本軍がフイリピンに与えた傷跡を癒したいという思いがあった。そんな彼女を触発したのが日系人の存在であった。

1972年バギオで初めて会った日系人が大久保さだえ（カタリナ・プーカイ）さんであった。さだえの呼びかけでシスター海野のもとへ集まったのは28人。次いで、２か月後に125家族が参加した。５年後には約1000人がシスター海野の手で探し出された。１年後の1973年、再び日系人たちがばらばらにならないようにと組織化されたのが「北ルソン比日友好協会」である。その中心的なセンターとなっているのが、今回私が訪れたアボン（日比友好親善会館）である。

シスター海野の働きは素晴らしいものがあった。日系人を探し出すだけでなく、戦争で亡くなられた日本の軍人の遺骨を探し出すことにも協力し、その熱意は日本政府をも動かした。

そして最大の功績は、私が思うには日系人たちの子弟に対する教育援助ではなかっただろうか。シスターが日本から日系人に何か援助出来ることはないかと尋ねた時に、彼らの答えは、物質的な援助ではなく子供たちへの教育のための手助けをお願いしたいというものであった。シスターは直ちに行動に移し、日本の知人、カトリック教会、国際友好機関に呼び掛け、大きな成果を上げることが出来た。私の今回のバギオ訪問の際にも、彼女の奨学金援助のおかげで、大学まで行き、生前の彼女には会ったことはないが、大変感謝しているという方にお会いした。今なおシスター海野の遺徳が脈々と生きていることを感じた。フイリピンに来て初めて彼女のことを知ることが出来、これだけでも大きな成果だったと言つてよいだろう。